

米国における詩創作指導についての研究

—詩人 Kenneth Koch の取り組みを中心に—

林 藤 成 美

1. 問題の所在と研究の目的

ことばは、人々に思いを表現する糸口を与える。ことばによって形作られる詩は、原始から「意識の自発的な表出」を本質に有していた。そして山際鈴子（1977）は「新しい感情、新しい感動、新しい思想を育てていけないのではないか」（山際,1977,pp44-45）と、詩創作の教育的意義を指摘した。だが、日本では山際や「たいなあ詩」を提唱した松本利昭らにより詩創作指導を進める運動が起こったものの、「画一化やマンネリ化などの弊害」（田中,2013,p.117）が起こり、児童詩教育は衰退に至った。しかし近年、佐倉義信（1999）や春日由香による一連の研究等、詩創作の教育的意義に再度焦点を当てる動きや、中井悠加（2013）の研究のように、英国における詩創作指導を取り上げる動きも起こっている。

一方、1960-80年代には英米において多様な詩創作指導が開拓される潮流が広く存在した。しかし米国でのこうした取り組みは、英国のものとは比べ日本での検討が少ない現状がある。そこで筆者は、子どもの創造性を育む詩創作指導を模索する中で、米国の詩人 Kenneth Koch の取り組みに着目した。Koch は詩人としての活動に加え、1960-80年代にニューヨークの公立小学校で詩創作指導を展開した人物であり、その諸著は多くの国語教師に読まれ続けるに至るが、日本では堀江祐爾（1984）における紹介にとどまっている。当時の米国社会を背景に、詩の学びを通して子どもの言葉を育もうとした彼の実践は、今後の日本の詩教育に重要な示唆を与えるものと考えられる。

以上を踏まえ本研究の目的を述べる。第一の目的は、米国において Kenneth Koch により開拓された詩教育の理論と実践を当時の社会背景を踏まえ考察し、米国における詩創作指導の一端を明らかにすることである。第二の目的は、Koch を始めとする詩人・教育者たちが追求した詩教育の様相を明らかにし、そこから示唆される現代に通じる詩教育の重要性の提言を試みることである。

本研究では文献研究の方法を用いた。本稿では、Kenneth Koch の展開した詩創作指導の様相と詩人ならではの指導理論に焦点を当て、取り上げる。

2. 米国の詩人 Kenneth Koch について

Kenneth Koch は詩人としての活動の傍ら、詩を用いた教育活動を展開した。彼の教育活動において米国の詩教育に影響をもたらした1つに、Teachers and Writers Collaborative（以降 TWC と記す）の創立に関わったことがある。TWC の創立メンバーであり、詩創作指導の先駆者的位置にあった Koch は、大学での教鞭活動に加え、介護ホームに暮らす老人たちやニューヨーク市にある小学校に通う子ども達に向けて詩の指導を行った。そしてそれらの詩の指導の取り組みから、今回取り上げる著書『Wishes, Lies and Dreams: Teaching Children to Write Poetry』（1970）『Rose, Where Did You Get that Red? Teaching Great Poetry to Children』（1973）『Making Your Own Days: The Pleasures of Reading and Writing Poetry』（1998）等が編み出された。

3. Kenneth Koch による詩創作指導実践

3-1. Kenneth Koch による詩創作指導実践 (1)

本節では『Wishes, Lies and Dreams: Teaching Children to Write Poetry』(以下 Wishes と記す)(1970)を取り上げる。1968年、Koch はマンハッタンのパブリック・スクール 61 (以下 P.S.61) で指導を行った。Koch はそれまでの指導経験から、詩の形式やテクニックを詩創作アイデア “poetry ideas” と名づけ、活動ごとに提示した。本書では、P.S.61 で Koch が取り組んだ詩創作実践が、以下の 19 の活動に渡り記録されている。(訳は稿者による。)

活動名 (詩創作アイデア)	Koch の記述、及び子どもの作品の考察
1. Class Collaborations コラボレーション詩 ...一人1行ずつ書き、クラス全体で一つの詩を作る	「書き出しを‘I wish’で始めること」といった簡単な型が示されたことで、詩への苦手意識を取り除き、詩を作り上げる達成感を子どもたちに与えた。
2. Wishes 願ひ事の詩 ...すべて「～だったらなあ (I wish)」の形で詩を書く。	‘I wish’で書き始めることで子どもの想像力を刺激し、自由な表現を促した。また繰り返し形式によって子どもたちの願望の連想・表現の工夫を促すことになった。
3. Comparisons 比喩の詩 ...詩のすべての行に比喩を入れる。	「へんてこな比喩を探してみる」よう促すことで、「風は、空がやってきているみたい」等、身近な事柄とイメージを子どもならではの目線で結びつける様子が表れた。
4. Noises 音の詩 ...詩のすべての行に音を入れる。	音から連想する言葉のつながりを探すよう促すことで「ガラスの音」と「ピンクウォーターを一飲みする音」を結びつける等、子どもならではの新たな発見が生まれた。
5. Dreams 夢の詩 ...夢で見たことを詩に書く。	子どもたちが無意識の領域で感じたことを自覚し、詩に表現することを促す。子どもたちは願ひ事、比喩、擬音語等を用いて、非日常的な夢のイメージを描いた。
6. Wishes, Noises, Dreams, and Comparisons Together 願ひ事、音、夢、比喩の詩 ...今までの要素を取り入れた詩を書く。	先の活動で生まれた詩から、願ひ事や音や比喩の含まれた夢の詩を聞かせることで、子どもたちは「音の鳴る夢」等、要素を組み合わせながら詩を書いていった。
7. Metaphors 暗喩の詩 ...「～のようだ」と書かない比喩を入れて詩を書く。	暗喩表現により、「鼻は黄色くないバナナ/頭はオレンジでないかぼちゃ/頬はヘタのないリンゴ/体は皆入った果物かご」等、自由で独創的なイメージ表現が描かれた。
8. A Swan of Bees 蜂の白鳥 ...暗喩の延長。一見関係のない事物を「(of)」で繋げ、詩を書く。	先の活動での Swarm of Bees の書き間違いから発展。関連のない言葉を結ぶことで、「A hat of kisses (いっぱいキスの帽子)」等、イメージを喚起する新たな表現が発見された。
9. I Used To / But Now 昔と今の詩 ...「昔、私は～だった/だけど今は...」の形で詩を書く。	奇数行の書き出しを“I used to”、偶数行の書き出しを“But now”にすることで、子どもたちは周囲との関わり合いや心情の変化を客観的に見つめて詩に表現していった。
10. If I Were the Snow, and Spring もし私が雪なら、春なら ...窓の外のお天気について別の視点(降る雪になる等)から詩を書く。	自分が雪になり人々を見下ろすことを想像して、やりたいと思う願望を表現したり、春の姿を想像してその際の胸の高まりを表現したりする表現が生み出された。

11. Lies 嘘の詩 ...各行に嘘を入れた詩を書く。	日常とかけはなれた空間を描くよう促すことで、より非現実的で空想的な場面を想定し、自分たちだけが思い描ける想像の世界を描き出す効果を与えた。
12. Colors 色の詩 ...各行に色を入れた詩を書く。	色が想起させるイメージを、比喩や対比等を用いて書いたり、色から場面（日常の全てが青色にそまったら、等）を想像したりして描く様子が見られた。
13. Sestinas セステーナ詩 ...セステーナ（六行六連詩）の型で詩を書く。	セステーナの型に従い特定の語（色）を文末に固定し、クラス全体で文を作るゲームを提案。連毎に場面を切り替え、色のイメージを取り入れた作品が書かれた。
14. Poems Written While Listening to Music 音楽を聴きながら書く詩	音楽を聞いて思い浮かんだ事柄を、比喩や色など既習の要素を用いて詩を書く様子が見られた。
15. I Seem to Be / But Really I Am 外から見た自分と本当の自分 ...「私は～のように見える/だけど本当は...」の形で書く。	「周りから見られている自分」と「実際自分自身が思っている自分の姿」の違いに目を向けさせ、周りからの目を意識し始める子どもたちの葛藤が引き出された。
16. Being an Animal or a Thing 動物やものになる ...なにか自分以外の動物や物になったつもりで詩を書く。	「ぼくはこの家の床。...口を踏まれると、そいつを飲み込んでやりたくなくなるけどしない」等、その視点に立った時に抱くであろう感情を想像させている。
17. The Third Eye 第3の目から見た詩 ...両眼に見えない世界を映す第3の目から見える世界を想像して詩を書く。	普段目に見えない世界を想像して書かせている。空飛ぶスーパーマンや神様を見られたり、自分自身の内側を見られたりすることを想像した詩が書かれた。
18. Collaborations by Two Students 2人の生徒によるコラボレーション詩 ...二人一組になって共同で詩を作る。	互いに文章を読みながら作品を創る、問答形式で詩を書く等の活動が行われた。互いからインスピレーションを得る他、相手をからかったり作品を出し抜こうと頭を巡らせたりする機会を与えるものであったという。
19. Poems Using Spanish Words スペイン語を用いた詩 ...スペイン語の単語を用いて詩を作る。	「教室に非常に多くのスペイン語話者がいたこと」から活動を提案。luna（月）、león（ライオン）等の語を用いて新しい休日を想像して書くことで、英語とは異なる言葉の響きを楽しむ様子が見られた。

堀江（1984）はここでの Koch の指導の特色を「1）子供の詩の心を解放しようとしている」「2）子供の側に立って考えている」「3）子供への動機づけを重視している」「4）詩の発想を中心においている」「5）作業の手順を明確にしている」「6）子供の精神発達段階をうまく利用している」「7）表現の型を具体的に示している」「8）身近からの取材を重視している」「9）比較によって新しいものを見つけだすことを重視している」「10）伝統的詩型を利用している」（堀江,1984,pp.16-18）と指摘する。

この堀江による指摘を踏まえ、Koch の指導を更に検討した。Koch は「詩を書くことで彼らは、幸福感と、能力と創造力を手にする（中略）それらは、子どもたちが友だちの作品を理解し、よさを受け入れられる柔軟な感性を育ててくれる」¹と述べる。Koch の指導では、子どもの内面世界への着目が随所で見られ、次第に自分以外の事物へと視点を動かす、自身の視点を離れて見える景色を想像する、友達と共同で詩を作る等、視点を自己の内面から周囲へと動かそうとする姿勢が見られた。ここからは子ども達自身の内面世界を捉える視点の獲得が、周囲を捉える「柔軟な感性」を

¹ Koch(1970)pp.51-52 訳と中略は稿者による。

育み、周囲と関わる姿勢を育むという一つのプロセスが見出される。また Koch が訪れた P.S.61 では、英語を母語に持たず英語の文法やスペリングに困難を抱える子どもが在籍しており、「スペイン語を用いた詩」では、詩創作を通して子どもたちの言語的疎外感を取り払う取り組みも見出された。

3-2. Kenneth Koch による詩創作指導実践 (2)

先の Wishes の諸活動を経た Koch は、大人の詩人の詩を用いた新たな活動を模索していく。

D. H. Lawrence 「The White Horse」(この活動は Wishes 最終章記載。)

<p>The youth walks up to the white horse, to put its halter on/and the horse looks at him in silence. /They are so silent, they are in another world.</p>	<p>若者が白馬のもとへ歩み寄り、立ち止まる/ 白馬が静かに彼を見つめる/静寂が満ちてい た、彼らはもうひとつの世界のなか。</p>
---	--

(訳は稿者による。)

「私だけの小さな世界」²
 私たちは海辺へ行き / 私は海を見つめる
 母さんは、私が景色を見ていると思う / 父さんは、私が水の中に入りたいのだと思う
 だけど私には、私だけの小さな世界があるの / じっと目を凝らし見つめるのは、私自身。
 海辺に沿って歩く / 他の誰でもない / 私の意志で。
 白馬のもとへ歩く / Snowy、それが彼女の名前 / 私は彼女に乗り / たてがみをしっかりつかむ / そして軽くつつくと / 彼女は歩き出す
 (中略—稿者)
 運命をたどって、何も見えない中を / おわりのない旅のように進む
 ひょっとすると、それが / 私の小さな世界なのかも。
 —Amy Levy、6

(訳は稿者による。)

Koch はこの Amy は Lawrence の言葉から「両親と自分との間に距離をもった」もう一つの世界を表現したとし、学習のねらいを「Amy や...すべての子ども達を、...優れた様々な詩を使って包み込む(surround)こと」³と述べた。子ども達独自の内面世界をより尊重し、その世界を表現する糸口を与えることが目指されたのである。『Rose, Where Did You Get that Red? 』(1973) (以下 Rose) では、このねらいのもと展開された、以下の 10 作品を用いた指導が記録されている。

1. WILLIAM BLAKE “The Tyger”
2. ROBERT HERRICK “The Argument of His Book”
3. JOHN DONNE “A Valediction: Forbidding Mourning”
4. WILLIAM SHAKESPEARE “Songs”
5. WALT WHITMAN “from Songs of Myself, sections 1 and 2”
6. WALLANCE STEVENS “Thirteen Ways of Looking at a Blackbird”
7. WILLIAM CARLOS WILLIAMS “This Is Just to Say” “The Locust Tree in Flower” “Between Walls”
8. FEDERICO GARCIA LORCA “Romance Sonambulo; Arbole, Arbole”
9. JOHN ASHBERRY “Into the Dusk-Charged Air”

² Koch(1970)p.251

³ Koch(1973)”Introduction”p.26 訳は稿者による。

10. ARTHUR RIMBAUD “Voyelles”

Koch はこれらの詩から詩創作アイデアを多様に示した。Blake の詩では、Koch は「動物に語り掛ける」というアイデアを示し、Herrick の詩では子どもたちがこれまでの活動で書いてきた詩の内容や自身が「主張」したい事柄を、詩に書かせた。Donne の詩からは、形容しがたい感情やイメージを、別の事物に結びつける（Donne が恋人との関係をコンパスの脚に喩えたことから）アイデアを示した。Whitman の詩からは自分で想像した世界のルール（なぜ空は青いのか等）を語る詩を書く活動を。Stevens の詩からは何かを幾通りもの視点から描く詩を書く活動を。そして以下に挙げる Williams の詩からは、何気ない事柄を一行一語で表現する活動を提案していった。

活動例：WILLIAM CARLOS WILLIAMS (AMERICAN, 1883-1963)

This Is Just to Say	「ちょっと一言」
I have eaten the plums that were in the icebox	冷蔵庫に 入っていた すもも たぶん君が
and which you were probably saving for breakfast	朝食 のために とって置いたのを 失敬した
Forgive me they were delicious so sweet and so cold	ごめん うまかった 実に甘くて 冷たくて

(訳は川本皓嗣⁴に拠った。)

The Locust Tree in Flower	「満開のニセアカシアの木」
Among of green	緑の 葉の 茂る隙間に
stiff old bright	硬くなり 古びた 輝き
broken branch	折れた 枝が

⁴ 亀井俊介・川本皓嗣編(1993)『アメリカ名詩選』岩波文庫

come	見える
white	白く
sweet	甘い花の香り漂う
May	5月が
again	またやってくる

(訳は稿者による。)

Between Walls	「塀の間の」
the back wings of the	病院 の
hospital where nothing	裏に なんにも
will glow lie cinders	生えていない 燃え殻だけ
in which shine the broken	の中でキラキラしている こわれた
pieces of a green bottle	グリーン色の ^{びん} 壺 のかけら

(訳は鍵谷幸信⁵ に拠った。)

・ Koch による、WILLIAM CARLOS WILLIAMS “This Is Just to Say” “The Locust Tree in Flower” “Between Walls”を用いた活動事例

私がこれらを教えようと思った理由の一つは、平凡なことばを用いて、ありふれたことがらを書いた詩人を子ども達に紹介するためであった...⁶

Koch は「さっと書くことができるような、一つの行に 1・2 語しかないという述べ方が一貫されている」詩に子どもたちが没頭する様子に着目した。そして「ちょっと一言」においては「自分になにか密かに喜びを感じてしまったことを謝る」という詩創作アイディアを設定した。そして「満開のニセアカシアの木」ではその表現の形式（「1 語だけの行、また支離滅裂なことばの並び」「その詩はセンテンスではなく、個々に独立した単語の一群であり、それによっていくぶん絵画を描く一連の筆のストロークのようになっている」）に着目し、「一行に一語の詩を書く」という詩創作ア

⁵ 鍵谷幸信訳編(1968)『現代の芸術双書 (27) ウィリアムズ詩集』思潮社

⁶ Koch(1973)p.100 訳は稿者による。

アイデアを設定した。「塀の合間の」は、Koch が「子ども達を「高い詩趣に富むもの」たとえば宮殿や雪をかぶった山々といった（中略）詩の題材として適するとされるものばかりから目を離させる」ことをねらい、用いた詩である。詩創作アイデアは、「美しいとは言われないが自分にとっては本当に美しいと密かに思え得ているものについて詩を書こう」というものであった。⁷

以下に示すのは、上記の三つの詩を用いた活動を経た 6 年生の子どもによる作品⁸である。

It	それは
was	単なる
just	ひとりの
a	大きく
big	でっぴりした
fat	年取った
old	くずの
hunk	かたまり
junk	だった
but	でも
I	僕は
like	そいつが好き
it cause	なぜなら
he	彼は
was	僕の
my	兄だった
brother	から
Jorge Rables	

(訳は稿者による。)

Jorge は「美しいとは言われないが自分にとっては本当に美しいと密かに思え得ているもの」というアイデアに対し、自分の兄を選んだ。その兄は「ひとり」で、「年取った/くずの/かたまり」つまり嫌われ者であったと推測されるが、Jorge はその兄に愛情をもっていることが分かる。

これらの Williams の 3 つの詩はすべて、ありふれたものの輝きや美しさを捉える感覚や、それらを平凡なことばを用いて語る方法を示した。ここでの新しい学びを挙げれば、それは詩の行というものへの新しい感覚であり、完成されたセンテンスの形にすることなく行から行へと書き進めることで生まれる新しいことば表現の感覚である。

Koch が Rose において示したこれらの指導の特徴としては、以下のものが見出された。

- ・ 大人の詩人による詩の扱い方に、一貫して観点の焦点化が見られる。
- ・ 詩人による詩は、子どもたちの興味や関心のあることがらが含まれているものになっている。
- ・ 子どもたちの内面に自分だけの（秘密の）世界が形作られるようになっている。
- ・ 詩人の表現から、自身の内面の曖昧な感情や考えを表す糸口を見出し、子どもたちに与えている。
- ・ ことばを音や色など様々なイメージと結びつけることを促している。
- ・ 各言語が持つ意味や味わいを、より明確な切り口（色彩）から捉えられるようにしている。

⁷ Koch(1973)pp.100-102 訳は稿者による。

⁸ Koch(1973)p.123

4. Kenneth Koch による詩創作指導観

4-1. Kenneth Koch による詩創作指導観：『Making Your Own Days』より

本節では Koch による詩教育書『Making Your Own Days The Pleasures of Reading and Writing Poetry』(1998) (以下 Making) を検討し、その指導観を考察する。次に、当時米国で起こった Koch の指導への批判と Koch の反応を取り上げ、Koch の詩教育の取り組みをより多角的に考察する。

Making では、Koch は詩を日常語と異なる「もうひとつの言語(separate language)」と主張する。詩における言葉の音楽が、その内容の「没論理性」をも超えて、読む者の「感覚に訴えかける」効果を持つ、と。また Koch は「なんの障壁もなく、事実と異なることを言うことができる」ことが、詩の言語の「類まれな言語特性」であると述べる。すなわち、Koch は詩ならではの様々な特性を活用することで、日常的な言語においては言い表すことが困難な自身の感情や考えを表現するための糸口を子どもたちに与え、自身の「言うべきことば」を掴ませることを目指したのである。

一方、Evelyn Wright は Koch の詩創作指導の取り組みの有効性と問題点を以下の三点に示した⁹。一点目は、子どもの詩に型を与えて書かせるのは創作プロセスの押し付けであるという批判、二点目は、詩人 Koch のシュルレアリスムの姿勢を子どもたちの作品に共通して持たせていることは表現の制約であるという批判、三点目は、読むことによる探求の意義を重視 (Louise M. Rosenblatt の論を引用しながら) する立場から、Koch は「ただひたすら読む」ことを軽視しているという批判であった。Evelyn は、子どもたちが教師の指示に応じて作品を制作するのではなく、子どもたち自身の経験を基盤にして目の前のテキストと交流することで生まれる創作のプロセスを重視すべきであると主張していたのである。

一点目の批判については、Koch は後年自身の実践への批判に触れ、自身の提示した課題は「創作プロセスの押し付け」ではなく、むしろインスパイアを与え、子どもたちが詩を書くことを可能にするためにあったと明示している¹⁰。また三点目の批判に関しては、Koch は詩人の詩から詩創作アイデアを取り出し提示したものの、彼が志向したのは「生徒たちが自分の力で、大人の詩を占めている感情を発見して、自分の力で再創造 (recreate) すること」¹¹であった。Koch がこの「発見」が生徒の力によって行われることをねらい、子どもの姿を基軸に詩創作アイデアを提案したこと、そして Rosenblatt が「読み」について「情報を取り出すスタンス」「喜びを味わうスタンス」の両者の絶え間ない往復を重視し、その基盤に「喜びを味わう」読みを位置づけている¹²ことを踏まえると、Koch の実践は「読むこと」を軽視してはならず、子どもたちとテキストの交流の第一歩を築こうとしたものと捉えられる。だが、二点目の「詩人としての Koch のシュルレアリスムの姿勢を、子どもたちの作品に持たせていることは表現の制約である」という批判については、検討の余地が残された。

⁹ Evelyn Wright, "Wishes, Lies and Dreams: Pedagogical Prescriptions" *Elementary English*(1974, Vol.51, No.4) pp.549-556 Evelyn Wright は米国の教育学者であり、西ワシントン州大学で教員を勤めた人物である。本記事の訳および要約は稿者による。

¹⁰ Kenneth Koch, "Educating the Imagination-A Celebration of Kenneth Koch", *Teachers & Writers Magazine*(1994, Vol.25, No.4) Teachers and Writers Collaborative p.2
本記事の訳および要約は稿者による。

¹¹ Koch(1973)"Introduction"p.40 訳は稿者による。

¹² 山元隆春(2014)より。山元(2014)は、Rosenblatt の論を考察したうえで、「作品に対する「喜びを味わう」読みを通過した後でなければ、「情報を取り出す」と「喜びを味わう」との往復運動は始まらないということを確認しながら「読むこと」の学習を創っていく必要があります」(pp.58-59)と述べている。

4-2. 詩人 Kenneth Koch の打ち立てた詩教育観

ここで本節では、Koch の詩人としての姿勢について考察した。ビート・ジェネレーション作家を中心として当時の米国で前衛的な文学表現を打ち立てた詩人を収録する『The New American Poetry 1945-1960』は、Koch はニューヨーク派詩人として位置づける。

ではニューヨーク派詩人 Kenneth Koch は詩人としてどのような姿勢を持っていたのか、Koch が後年述べた祝辞の記録と、Daniel Kane(2003)に記録された対話を手掛かりに考察した。Koch は、自身の詩表現形式を模索する過程では Whitman らの存在が大きかったと語っている¹³。Koch は詩を「自分の両親や兄弟姉妹や他の子ども全員のいるこの世界から離れる」手段と捉え、Whitman や Williams らの詩から影響を受けつつ、自身の主張に最も適した表現を常に追い求める姿勢を持っていた。そして影響を受けたのが、ハーバード大学での Ashbery (後にニューヨーク派詩人として位置づけられる)らとの出会いであり、シュルレアリスムであり、「クレイジーなすべての事柄」であった¹⁴。また Daniel Kane(2003)は、Koch の大きな特徴はユーモアの重視であったと言及¹⁵し、Koch 自身「ニューヨーク派詩人の美学」は「豊富な新鮮な空気、詩を楽しむこと、無意識の領域を活用すること、話し言葉を用いること、言葉の外見に注意を払うこと」¹⁶と語る。また Koch は指導にあたり「意識の流れ」の喚起を重視したと明かす¹⁷。つまり、無意識の世界やユーモアを重視する姿勢は、まさに彼の詩人としての詩観に基づいていた。また Rose で取り上げた詩人たちは、Koch にとってインスパイアを与え、同時に脱却を目指し続けた存在であったのである。

以上を踏まえ、先の批判について再度検討した。確かに Koch は自身がそうであったように「クレイジー」になることを提案し、現実の「世界から離れる」方法として、詩創作を指導した。だが Koch が目指したのは、Evelyn の言う「詩人としての Koch のシュルレアリストの姿勢」¹⁸を子どもたちに持たせることを通して、その先で子どもたちの詩表現が次々と新たな表現を獲得することであった。子どもたちが見出すべき新しい詩表現の具体には、何も制約を加えていないのである。むしろ Koch は、子どもたち自身を詩人と捉え尊重し、彼ら自身の掲げる主題に最も適した新たなことば表現の獲得を目指したと捉えることが出来よう。

5. おわりに—研究の成果と展望

Koch の詩創作指導は、詩人ならではの視点を詩創作指導に持ち込んだことに大きな意義を見出せる。Koch は詩を、非現実的な事柄を自在に言い表す「もう一つの言語」と捉え、詩を通して、日常では言い表すことが困難な感情や考えを表現する糸口を子ども達に与えた。そうすることで Koch は子どもたちに自身の内面と向き合わせ、表現する言葉を獲得させた。また社会問題であった非識字の観点からは、「非識字サイクル」を断ち切り「自分のことば」を獲得させる切り口として、詩創作を示したというもう一つの意義を見出せる。

詩は子どもたちの内外への認識の深まりと、独自のことば表現の獲得を可能にする。ここに、詩

¹³ Kenneth Koch, "Educating the Imagination-A Celebration of Kenneth Koch", Teachers & Writers Magazine(1994,Vol.25,No.4) pp.2-6 訳は稿者による。

¹⁴ 同上、訳は稿者による。

¹⁵ Daniel Kane(2003)p.10 訳は稿者による。

¹⁶ 同上 p.95 訳は稿者による。

¹⁷ Kenneth Koch, "Educating the Imagination-A Celebration of Kenneth Koch", Teachers & Writers Magazine(1994,Vol.25,No.4) p.2 訳は稿者による。

¹⁸ Evelyn Wright, "Wishes, Lies and Dreams: Pedagogical Prescriptions" Elementary English(1974,Vol.51, No.4) p.550 訳は稿者による。

創作指導の教育的かつ社会的に大きな役割が存在しているのである。

Koch の取り組みからは、我が国における詩教育に以下の三点において大きな示唆が見出される。一点目は、詩を常に変化し続ける存在とする詩観である。常に新鮮なことは表現との出会いが重要であり、日常世界の前提や価値観を離れた、新たな表現の発見が保証される必要がある。二点目は、詩創作指導が子どもたちの内外への認識の深化と拡充をもたらすという詩教育観である。学習者側の反応を中心に据えながら指導を構築し続ける必要があり、その鍵を握るのが、三点目の「インスパイア」(表現へ駆り立てるきっかけ)の重視であろう。Koch は詩特有の要素を学習者に「インスパイア」を与えるものとして用いた。技巧的要素や文学的に解釈が困難な要素を生徒の表現を活発化させる切り口として用いた Koch の実践は、子どもの内外への認識の深化・拡充と、詩の技巧的(文法的)要素の習得が相反するものでないことを示した点でも大きな意味を持つだろう。

本稿で取り上げることが出来なかったが、Koch らが打ち立てた詩教育は、当時の国語教育に存在感を持ち、TWC によって現代まで引き継がれていることが明らかになった。だが本研究では 1980 年代以降から現代にいたる米国における詩教育の全体像および、Koch の取り組みを批判する立場から取り組まれた詩教育について考察するに至らなかった。Koch による詩創作指導とともに、様々な立場のもと行われた詩教育の様相を明らかにすることで、より米国における詩創作指導の特色を鮮明にし、我が国における有効な詩創作指導の具体的な構造について検討する必要があるだろう。

6. 主要参考引用文献・URL

- 春日由香 (2016)「児童詩創作指導における「模倣」と「外言の内化」」『読書科学』第 58 巻第 4 号 pp.185-197
- 春日由香 (2018)「児童詩創作指導における「比喩の指導」」『国語科教育研究』第 135 回東京ウォーターフロント大会発表要旨集、全国国語教育学会
- 佐倉義信 (1999)「児童詩創作指導カリキュラムの開発に関する研究：「基本的な能力」とその要素を中心に」『国語科教育』第 46 巻 pp.95-88
- 諏訪優 (1994)『ビート・ジェネレーション』紀伊國屋書店
- 田中宏幸 (2013)「平野或の詩創作指導の特色と意義」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第 2 部 第 62 号 pp.117-126
- 中井悠加 (2013)「イギリスにおける詩創作指導の理論と実践に関する研究」(広島大学教育学研究科博士論文)
- 堀江祐爾 (1983a)「アメリカにおける児童詩の創作指導」昭和 59 年 2 月『言語表現研究』第 2 号 兵庫教育大学言語表現学会 pp.32-48
- 堀江祐爾 (1983b)「アメリカの国語教科書における詩の創作指導—第 3 学年を中心に—」昭和 59 年 3 月『兵庫教育大学研究紀要』第 3 巻 pp.147-164
- 堀江祐爾 (1984)「米国の詩人による児童詩の創作指導：Kenneth Koch 氏の実践を中心に」昭和 59 年 6 月『国語教育学研究誌』第 5 号 大阪教育大学研究室 pp.HY1-HY18
- 松本利昭 (1964)『たのしい詩のかきかた「たいなあ方式」たいなあでかこう』少年写真新聞社
- 森田信義 (1992)『アメリカの国語教育』溪水社
- 山際鈴子 (1977)『児童詩の世界—詩を教えてくれた子どもたち—』くろしお出版
- 山元隆春 (2014)『読者反応を核とした「読解力」育成の足場づくり』溪水社
- Jonathan Kozol、脇浜義明訳(1997)『非識字社会アメリカ』明石書店

- Anthony Frederick, S.M. Editorial Chairman and the Committee on a Bibliography of English Journal Articles, *Annotated Index to the English Journal 1944-1963*, NCTE 1964
- Carol J. Fisher/C. Ann Terry, *Children's Language and the Language Arts*, McGRAW-HILL, 1977
- Carol J. Fisher/C. Ann Terry, *Children's Language and the Language Arts*, McGRAW-HILL, 1982
- Carol J. Fisher/C. Ann Terry, *Children's Language and the Language Arts A Literature-Based Approach*, McGRAW-HILL, 1990
- Daniel Kane, *What Is Poetry-Conversations with the American Avant-Garde*, Teachers & Writers Collaborative, 2003
- Donald M. Allen, *The New American Poetry 1945-1960*- Grove Press Evergreen Books, 1960.
- Evelyn Wright, "Wishes, Lies and Dreams: Pedagogical Prescriptions" *Elementary English* (1974、Vol.51, No.4) NCTE
- Kenneth Koch, *Wishes, Lies and Dreams- Teaching Children To Write Poetry*, New York :Chelsea House, 1970
- Kenneth Koch, *Rose, Where Did You Get that Red? Teaching Great Poetry to Children*, Vintage Books, New York, 1973
- Kenneth Koch, *Making Your Own Days The Pleasures of Reading and Writing Poetry*, Touchstone, 1998
- Kenneth Koch, "Educating the Imagination-A Celebration of Kenneth Koch", *Teachers & Writers Magazine* (1994, Vol.25, No.4) Teachers and Writers Collaborative
- Rosellen Brown 氏, *The Whole Word Catalogue*, TWC, 1972
- David Shapiro, 'A Conversation with Kenneth Koch', Jacket 15, December 2001 – Jacket Magazine – <http://jacketmagazine.com/15/koch-shapiro.html> (最終閲覧：2019年1月20日)

(広島大学大学院博士課程前期修了)